

「学習者主体の教育へ質的転換—教師の行動について」研究ノート

今出 敏彦[†]・町屋 杏心^{††}・森 結実子^{†††}・久慈 彩華^{††††}

A Note on Teacher Behavior-Towards a Qualitative Change in Learner-centered Education

Toshihiko IMADE[†], Ako MACHIYA^{††}, Yumiko MORI^{†††}, Ayaka KUJI^{††††}

ABSTRACT

This study is not only about the qualitative transition to learner-centered education, but also the trend of educational reform in Japan, while student attending the university's teaching courses are learning about teaching profession and curriculum theory from the first grade. Now, it was started by setting up a research theme with the realization that this is an issue that students really want. A questionnaire survey was conducted, and the results show that all classes, assignments, exams, and grades are connected. In the development stage, it is better to create an environment where teachers can overcome problems by distributing and advising each student according to subjects and fields.

Key Words: *student-centered education, Rubrics, Grades, Assignments, Qualifications*

キーワード: 学生主体の教育、ルーブリック、成績、課題、資格取得

1. はじめに

本研究は、本学教職課程を受講する学生有志が、1年生の教職総論から2年生の教育課程論を学びながら、「学習者主体の教育へ質的転換」が我が国の教育改革の動向であるだけでなく、今、正に学生自身が切実に求める課題であることを自覚して、研究テーマを設定したことから始まったものである。

学生の問題設定は、「教育課程論を通じて現代の教育界が抱える問題点について、学校現場の状況を調べるところから始め、私たち『学習者が主体となる教育へ向かうための質的転換とは何か』を確認する」というものである。

令和1年12月9日 受付

† 創生デザイン学科・基礎教育研究センター准教授

†† 工学部生命環境科学科・2年

††† 感性デザイン学部創生デザイン学科・2年

†††† 感性デザイン学部創生デザイン学科・2年

2. 概要・方法

執筆分担者と協力者がアンケート調査結果を基にして「成績について」、「資格取得について」、「試験について」、「授業について」、「課題の取り組みについて」の各項目毎に、現時点、発展段階、新しい時代に向けて通時的分析を行った。「教職総論」を受講する一年生にアンケートを配り調査した。後期授業「日本国憲法」を受講する3年生にもアンケート実施。(内容は添付資料参照)

「成績について」

発端は私自身の学生時代の経験が元である。主に成績について学習者主体の教育ではなく教育者主体の教育を感じた。同じ教科でも指導教員や定期考査の難易度設定で成績が上下されてしまう。原因は①学年全体での難易度設定または進行状況の確認不足②個人差のある学力の伸び

①例 AクラスとBクラスは同じ教科をそれぞれ別の教師から指導を受けている。この二つのクラスの教員は互いに授業や試験での難易度設定や現在の進行状況を確認することが出来ていない。＝学生個人での学力にも差が表れる(②にも繋がる)

結果AクラスとBクラスは同じ学年で同じ教科のテストを受けているにも関わらず定期考査ではそれぞれに用意された難易度が違うテストを受けることになる。もし仮に定期考査でAクラスとBクラスがどちらも同じ点数を得た場合でも表面

上では分からないが学力にクラスで差が出ている。

②例 入学時テストでは同じ点数を得ていた二人の学生(同クラス)が卒業時には大きく成績に相違が見られた。

アンケート調査「高校時代もっとうしてほしかった点」(1年生)

【発見した結果】高校を卒業して間もない大学1年生はより高校生に近い意見を持つ。

【現時点での意見と分析】アンケート調査「学習者主体の教育への質的転換」(主に授業カテゴリー)を通して成績のつけ方について教師の行動を見直す必要があると感じた。

- ・特定の教科書の購入を勧められたが授業で使用しない

＝教師本人は理解度をより深めるための参考書として進めている

- ・自分たちのやりたいようにやらせてもらえなかった

＝その授業内で学習する内容と学生の求めるものの解釈違い

- ・先生によって難易度の差がある

＝教師間での確認不足等

以上から、教師間に意識の差、即ち「ずれ」が学校内で起きている。教師の意識とは、言わば教育のねらいであり学生に最も反映されなければいけない、伝わらなければいけない意識である。「ずれ」は教師間だけでなく生徒と教師との間にも生まれている。例えば「教科書を使用しない」という意識を学生がアンケート結果で抱いているが、実際には教師は参考書として提供・紹介している為授業として

は使用を必ずするという訳ではない。「自分たちのやりたいようにやらせてもらえなかった」という意見は生徒が学習に向けている解釈と教師が授業によって伝えたいねらいが伝わっていない。これら教師の意思は実際に教師本人に確認を得ている。冒頭で述べた難易度・進行度のずれも同じく、これらはすべて教育者主体の教育である。

またアンケート結果を「授業」「課題」「試験」「成績」等カテゴリー別にした所、「授業」に関しての意見が多数寄せられた。しかし「成績」にだけ問題があるという訳ではなく、「授業」の中に「課題」「試験」が含まれており、それによって「成績」が付けられている。カテゴリーに分け結果により授業についての意見が多いと言っても、教師への課題は全て繋がっているのである。

【まとめ】

アンケート結果、主な原因は教師の間での授業進行度・難易度設定や評価基準のずれ、生徒の理解度の確認不足により相互理解ができていない事からの互いの意識の差である。意識の差は言わば「ずれ」であり、教師間でのずれは生徒自身の成績評価にも大きく影響する。その意識の差はいずれ生徒と教師間にも生まれている。

現在の学校には「相互理解」が欠けている事が見えた。相互理解の不足の差とは「ずれ」である。指導難易度、進行状況、教師と生徒の意思にずれが存在し教師間、教師と学生同士の相互理解を行う必要がある。中には全講義終了後に授業評価ア

ンケートを行っても改善が行われない為に講義回数序盤あたりでアンケートを行い不満や改善点を教師が把握、教師が次回から反映し教師と学生の相互理解を図るべきという意見もあった。

＝学生自身から教師との意思の疎通を望まざるを得ない程の状況である。

「資格取得について」

高校を卒業して間もない1年生は実際に高校生活で、どのような考えをもっていったのかを比較するために、アンケートを実施した。(普通・工業高校)その他資格取得については 3/36 という結果だった。資格取得についてのアンケート内容について、資格の案内があってもよかった。

現時点の意見として、「新たに資格取得にチャレンジするための後押しをしてくれる「サポート」してくれる教師が近くに居て欲しかった」、「期待される人間像の人間能力開発を強く進めている現在なのに話が食い違っているように感じた」。

発展段階として、「資格取得について」に限らず、学生の意見を尊重したサポートに教師も配慮すること、学科問わず、さまざまな活動において、教師もさまざまな角度で学生をみて学生理解へと視野を変えていく。

新しい時代に向けて、学生の意思を尊重し、教師からも学生を後押ししていける環境に向かってほしい。また、時代の流れに任せるのではなく、学生の意見に教師が寄り添い耳を傾ける形になってほしい。

以上から、「新しい時代を洞察する上で、

学習者主体の教育になるにはどうあるべきなのか。どのような場作りが良いのか」という点に注目した。そこで、もっと中身を重視するためアンケート内容を変更し、私たちよりも上の学年はどのような考えをしているのか？私たちを軸に1年と3～4年を比較してみようと思った。

結果は、資格取得については11/107と増えた。学年が上がり考えかたや、とらえ方が変わり批判的な考えよりも改善点をしっかり理解し相手に伝える力が見えるアンケートだった。

私たちは、最初は学生自身の個々の観点からの改善要求にばかり目が止まったが、重要な部分に注意が行き届いていなかったことが今回のアンケート結果を通じ見え始めた。様々な分野ごとであるが「学習について」にしろ、「授業について」にしろ、本来テーマは違うにしろすべて教師の行動にループしていることが見えた。つまり、教師の行動が学習者主体の教育への質的転換の鍵なのだと気づけたのだ。

今回3～4年生にアンケートをしていなければ、ここまで気づくことにまず、行きついていなかったと思う。「様々な視野で見る」というのは教師だけではなく、学生「私たち」も必要であることにも改めて気づいた。一つの問題点から、学科問わず全体で一つになれる学習スタイルも教職を学習するうえで利点だと思った。これもまた、資格取得に限らず共通する点だと思った。

「課題について」

課題は学生時代に何度も取り組むことになる。それはアンケート結果などから、

学校生活で学生の学習状況をみるのに一番効果的なものであった。授業の予習・復習・苦手科目等弱点となる箇所など、自分の為になる大切な取り組みの一つになる。従って、課題は今後の教育活動にとって非常に重要なものであり、改善できる工夫を見出したいと思った。

また、試験も学生にとっては成績に影響してくる重要なものなので、今よりも安心して試験に望み、結果として大きく残すことが出来る方針を取り入れることはできないかと思った。これらのことから、課題や試験の重要性を教師や学生に理解してほしいと思い、学力について調査してみようと考えた。

その調査方法とは、教職を受講している3～4年生に、学校生活や教育活動で感じたことや改善点について挙げてもらい、アンケートの結果をまとめるという方法だ。

アンケートの結果、学生と教師との関わりが薄く、学生が改善すべき点や欠点に気付かないことが挙がった。更に、一人では解けない課題もあるので、グループワークや話し合いを行い、他者の意見を参考に理解を深め、自分の課題と照らし合わせることで問題が解決できるのではないかという意見もあった。これにより、一人では解決できない課題の際、他者との交流を行うことで、自分では気付かなかった問題が見えてくるので、コミュニケーションを大切にしたいという学生がいることが分かった。

試験については、テストの範囲を細かく教えて欲しい、要点がまとまった対策プリントを作って欲しいという要望があ

った他、教師によって試験の難易度に差があるので統一して欲しい、授業で習っていない問題が出題されたので授業で話した内容の問題を出して欲しいという意見もあった。これにより、試験の出題形式や試験前の対策が十分に出来ていないという意見を持つ学生がいることが分かった。

また、アンケートで一番多く挙げられたのが授業についてだった。授業は課題や試験の前段階なので、見直さなければならない。これらをみていくと、授業・課題・試験・成績と、すべて繋がっていることが分かる。なので、どれも怠ってはいけないのだ。

このような結果から発展段階として、教師が学生一人ひとりに苦手科目や分野に沿って課題配布・アドバイスをし、克服できる環境にしていくことが大切である。だが、学生一人ひとりにアドバイスを行うと、教師への負担が大きくなるというデメリットが生じてしまう。更に、克服する点が把握できた所で、意欲的に取り組むといえそうはならない。なので、自分の苦手分野を自分で把握し、具体的な克服方法を教師に相談し、学生が積極的に勉強に励む工夫をすれば、取り組むのではないだろうか。

これらのことから、教師が学生の苦手な箇所、改善点を把握し、学習のサポートができるよう手助けを行うことにより、一層向上していけると感じた。そして学生は、教師や他者からのアドバイスを参考に自ら進んで勉強に励むよう、楽しく学べる環境を作って欲しい。また、試験については、準備が不十分なまま、試験を学

生に受けさせることがないよう教師側は対策を練る必要がある。

そして新たな課題として、予習・復習した箇所が理解できているのかという問題が見えてきたので、次は学力の向上について調査してみようと思う。

3. 結果と考察

「ルーブリックについて」

今回調べていくなかで、学生と教師の間に目標設定の捉え方に差が生じていたことに気が付けた。（上文）

これは、アンケートを実施し解決に導く中、教師の行動と結びついた一つでもある。「ルーブリック」を取り入れることによって、学生の思いと教師の考えが目に見えて分かり相互の気持ちを受け取りやすい一つのやり方だと改めて実感した。差が生じること、それを埋める立場が教師としてのあるべき立ち位置でもあり、また、私たち学生も振り返り、何を求められ何を解決すべきか、現状を理解し「発展段階」へと繋がり「新しい時代へ向けて」の筋道が明確に考えられることも分かった。そして、新たな課題として「ルーブリック」を今後どのように活かすか考えるべきであることが分かった。

「成績について」

主に成績について学習者主体の教育ではなく教育者主体の教育を感じた。

例）AクラスとBクラスでは同じ教科を別の教師から指導を受けている。

アンケート調査「学習者主体の教育への質的転換」

・特定の教科書の購入を勧められたが授業で使用しない。

・自分たちのやりたいようにやらせてもらえなかった。

以上の結果から学生個人での理解度に差が生まれている。この「差」とは一体何だろうか。また教師間にも「差」が学校内で起きていることが見えた。

実際には教師は参考書として提供・紹介している為授業としては使用を必ずするという訳ではない。結果により授業についての意見が多いと言っても、主な原因は教師の間での授業進行度・難易度設定や評価基準のずれ、学生の理解度の確認不足により相互理解ができていない事からの互いの意識の差である。指導難易度、進行状況、教師と生徒の意思にずれが存在し教師間、教師と学生間の相互理解を行う必要がある。

また、今回はアンケート調査「学習者主体の教育への質的転換」を主に考察を広げたが、次回はアンケート調査「高校時代もってこうしてほしかった点」(1年生)をさらに展開させていきたい。

「資格取得について」

アンケート結果は、(普通・工業高校)その他資格取得については 3/36 という結果だった。

アンケート内容については、意思を尊重し教師からも学生を後押ししていける環境に向かってほしい等から、「新しい時代を洞察する上で、学習者主体の教育になるにはどうあるべきなのか。どのような場作りが良いのか」という点に注目した。私たちよりも上の学年はどのような考えをしているのか？

結果は、資格取得については 11/107 と増

えた。

私たちは、最初は学生自身の個々の観点からの改善要求にばかり目が止まったが、重要な部分に注意が行き届いていなかったことが今回のアンケート結果を通じ見え始めた。

「課題について」

試験の出題形式や試験前の対策が十分に出来ていないという学生がいることが分かった。また、アンケートで一番多く挙げられたのが授業についてだった。授業は課題や試験の前の段階なので、授業についても見直さなければならない。授業・課題・試験・成績と、すべて繋がっていることが分かる。

発展段階としては、教師が学生一人ひとりに苦手科目や分野に沿って課題配布・アドバイスをを行い、克服できる環境にするのがよいと思う。だが、学生一人ひとりに苦手科目をアドバイスすると、教師への負担が大きくなるのではないかというデメリットが生じてしまう。自分の苦手分野を自分で把握し、具体的な克服方法を教師に相談し、学生が積極的に勉強に励む工夫をすれば、取り組んでくれるのではないだろうか。

4. 提言 新時代への学校教育

新時代への学校教育は中間テスト・考查等の実施時、個人の学力の伸びを確認。成績をつける際他クラスとの会議、教員同士での進行状況の確認や評価基準について話し合いの場を設ける等、「相互理解」の場を設けた学校である。

《学び合い》

青森県八戸市立長者中学校では「学び合い」という授方法が授業内で行われています。「全員がわかる・できる」を目指しており、そのため教師は授業内で「一人も見捨てない」ことを目指している。

具体的には課題の提示（5分）＋「学び合い」による交流（40分）＋振り返り（5分）という時間配分であり、「学び合い」とは学級の全員が課題を達成することを目指して子ども同士で聞き合い学び合い、教え合うという内容。私も在学時実際に体験していたが、普段から話す話さない関係なく課題がまだ終了していない学生の机に達成した学生が集まり教える環境が生まれる。時にはその輪に教師が入り、従来の教員が教卓に立ち学生が机に向かうという従来から馴染んでいる画を打ち壊す教育である。

このように「学び合い」は教師と学生との距離が縮めるという方法により意思の疎通、学力の向上が達成された例である。実際に3年間での成績の平均値は向上し、青森県平均を上回った結果が記されている。この「距離を縮める」という行為は現在の学校に欠けている「相互理解」の為の方法である。

5. 課題と展望

まず、本研究の目的である教育の質的転換の方向は、現時点では、本学の教育が学習者主体の教育ではなく、教育者主体の教育として学生達に感じられているこ

とがアンケート結果や、「成績」や「資格取得について」、「課題について」の学生の分析から確認出来た。教員間、教員と学生相互の理解の必要性、教員が学生の意思を尊重し、学生の意見に耳を傾けられる環境整備が求められた。続いて、課題への取り組みから、学生が経験する授業・課題・試験・成績の各段階で、「すべて繋がっていること」が分析されたが、そのような学生側の視点で抽出されたのが、「新しい時代を洞察する上で、学習者主体の教育になるにはどうあるべきなのか。どのような場作りが良いのか」という問いであり、教師の行動が学習者主体の教育への質的転換の鍵なのだということの気づきを得た。一方、教員側への課題や要求がもたらす負担への懸念や、「学生が自分の苦手分野を自分で把握し、具体的な克服方法を教師に相談し、積極的に勉強に励む工夫」が有効であるとの提案もしている。学生自身の学修意欲や態度もさらに調査が必要となる。現時点では2回のアンケート調査の分析が完了していないので、引き続き、分析を進める。

一方、教員側から見ると、以上については、本学で既に実施されているアンケートやポートフォリオ等によって、課題となって我々には周知の事柄ではないだろうか。しかし、「我々に周知の事柄」に固定して、解決方法も既に考案済みであるという教員の思考・行動そのものに問題があり、そのことを我々教員が完全に見失っていたのである。この厳しい事実を学生達の取り組みの中から教えてもらったのではないだろうか。

今後の研究で手掛かりとなるのが、「ル

ーブリック」を用いての教員と学生の相互理解や差異を視覚化する学習方法の開発と活用である。

学習者主体の教育へ 質的転換 教師の行動ノート

ブランドデザイン

町屋 森 久慈

研究ノートを始めた理由

学習者主体の教育について、現時点でどのような状況下にある、またそこから質的転換するためにはどうすべきなのか？「教育課程論」でグループワークを行った。

↓

そこで、私たち5班の高校生活を振り返って、教師に対して「こうして欲しい」という経験を踏まえて、では1年生はどのような考えを持っているのか。高校生活を振り返って改善点をアンケート調査として協力して貰った。

そうした結果、教師の行動のついて浮かび上が点が見えてきたので教師の行動に着目したためノートいわゆる研究ノートを制作することに決めた。

学生の立場として

教師の行動… ※5班の意見

- ✓久慈 (成績について)
- ✓高松 (試験について)
- ✓町屋 (資格取得について)
- ✓松尾 (授業について)
- ✓森 (課題の取り組みについて)

成績について

現時点での意見	発展段階として	新しい時代に向けて
<ul style="list-style-type: none"> 【課題】 ①教師間の難易度・進3.3 事の権限不足 ②個人差のある学力の受け 	<ul style="list-style-type: none"> ➢【方法1】アンケート調査「高校時代もっとこうしてほしい点」(1年生) ➢【方法2】アンケート調査「学習者主体の質的転換」(3年生) 	<ul style="list-style-type: none"> 【まとめ】現在の学校には相互理解が欠けている →八戸市立2 者1 学校「学び合い」によって相互理解へ

資格取得について

現時点での意見	発展段階として	新しい時代に向けて
<ul style="list-style-type: none"> ✓新たなオピニオンを後押しする教師が近くて欲しい。 ✓期待される人間性から人間能力開発に反映して欲しい。 <p>↓</p> <p>新しい時代を模索し、所得得取へ生徒自身が導き行中、個人差を踏まえて人権の能力を教師がもっと高めて欲しい。</p>	<p>(資格取得に関して)</p> <p>資格取得を推奨し、意欲を尊重したサポートに教師が配慮する。</p> <p>↓</p> <p>学科をまたいで活動も、それに促す教師方も生徒から様々な声で私たちが(生徒)を見て生活理解へ関心を変えていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢意思尊重として教師からも生徒を後押ししてける環境に向かっで欲しい。 ➢時代の流れに任せるのではなく生徒の意思に教師も寄り添う形でサポートし、最終的には生徒が卒業してから未来を切り開いていく流れになると思う。

試験について

現時点での意見	発展段階として	新しい時代に向けて
<ul style="list-style-type: none"> ✓テストや入試のための詰め込み授業になっている。 ✓そのため、テストが終わると覚えたい知識を忘れてしまう。 ✓丸暗記させるも育では、学力は身につかず、想像力や思考力が失われると考える 	<ul style="list-style-type: none"> ➢マウスのテストや入試だけでなく、想像力、思考力を養うように記述問題を取り入れる。 ➢日頃から、想像力や思考力を養うような授業(グループワーク)を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ➢入試やテストで思考力を養う問題の割合を増やす。 ➢将来的にも役に立つ知識を身に付けさせる。

授業について

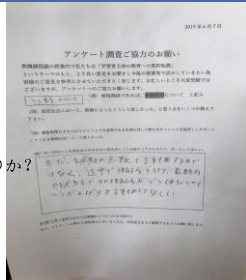
現時点での意見	発展段階として	新しい時代に向けて
<ul style="list-style-type: none"> ✓黒板にただ教科書を読み、内容を説明し上げるだけでなく、説明も入れてほしい。 <p>↓</p> <p>理解の悪い授業では内容が読める生徒が出てくる</p> <p>↓</p> <p>試験のために一瞬は覚えてもすぐに忘れてしまう予備がなくなってしまう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢生徒の理解を促すような授業を行う。 ➢生徒に気を配り、適宜注釈を加える授業を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ➢時間内に深い理解を生徒に与えられるような授業ができるような教員の育成。 ➢生徒に気を配り、理解度に合わせて臨機応変な対応ができる教員の育成。 ➢一瞬覚えてすぐに忘れる授業ではなく、活用し続けられる授業になってほしい。

課題の取り組みについて

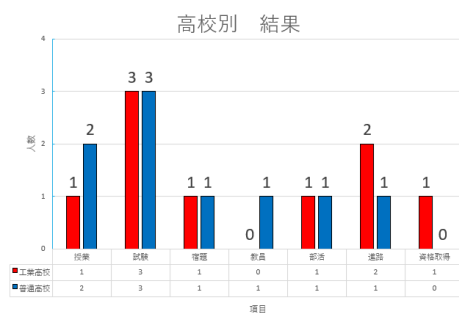
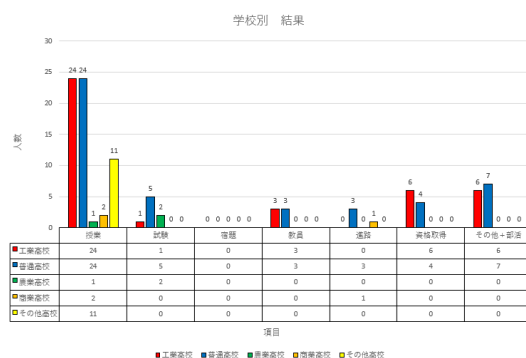
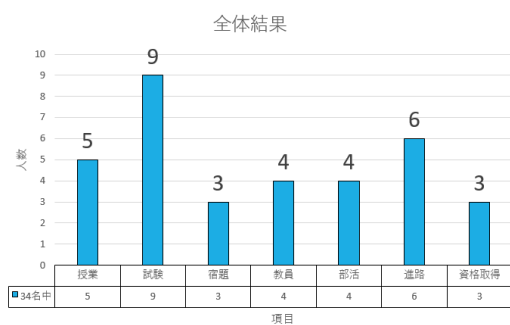
現時点での意見	発展段階として	新しい時代に向けて
<ul style="list-style-type: none"> 学生と教師との関わりが薄い 一人では解けない問題がある 改善すべき8 や欠8 に気付かない コミュニケーションが不足している 学生の為になる重要な取り組みの一つなので怠ってはならない 	<p>教師が学生一人ひとりに苦手な科目や分野に沿って課題配布・アドバイスをし、完璧できる環境にする</p> <p>↓</p> <p>だが、意欲的に学生が勉強に励むというとはならない</p> <p>↓</p> <p>学生が楽しんで勉強できる工夫をする</p> <p>↓</p> <p>コミュニケーションをとる機会を増やす</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教師が学生一人ひとりの苦手な箇所、改善8 を把握し、学習のサポートができるよう助けを行うことにより、一層向上して欲しい 学生が楽しく学べる環境作りを目指してほしい

学生の声

「教育総論」受講生にアンケートを実施した。同じく教職課程を受けているフィールド内で1年生は、どのような考えをもっていたのか？状況を把握することに観点を置き調査を開始した。



「学習者主体の教育へ質的転換―教師の行動について」研究ノート（今出・町屋・森・久慈）



アンケート内容

授業について ※スライド授業というワードが多数挙げられていた。
 ・学生のレベルに合わせて授業の進む速さを考えて欲しい。
 授業が分からないまま進んでしまい学生達の理解が到達できていなかった。

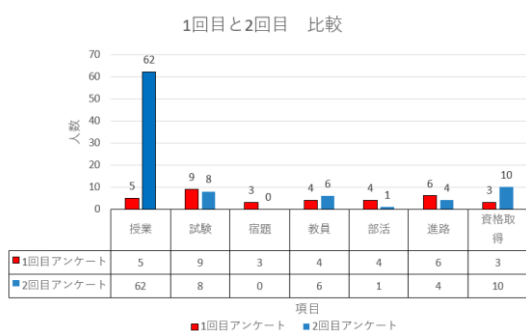
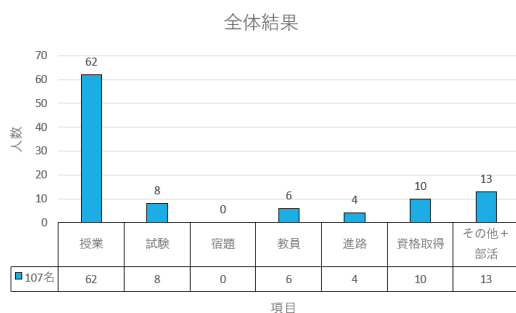
試験について
 ・教科によってテストの難易度が異なるので、統一してほしい。
 統一にしないと、学生一人ひとりの理解度を把握する為にあるテストの意味がない。

宿題について
 ・他の教科の課題もあり課題の量も考慮して欲しい。
 ※考えるべき点が重複することが見えてきた。

教員について
 ・勉強な学ぶことの大切さをもっと教えて欲しい。
 学生の話を聞いてほしい。学生によって態度を変えないでほしい。
 各学級で1教科に複数の担当教員がいるが、テストまでの進捗度合いが異なっていた。
 その為、他クラスでテストの点数に差が生じると感じた。

部活動について
 ・指導が理不尽だと感じた。もっと丁寧に教えて欲しい。

進路について
 ・具体的な説明や面接練習など進路達成に向けてしっかりサポートしてくれる教師がいて欲しい。



まとめ

✓ アンケート結果を踏まえて分かったこと
 ✓ 各校の課題点を整理

➢ 学習者主体の教育へ向かうには、生徒の理解が最も視しなければ始まらないことが見えてきた。
 ➢ ある程度の生徒からの意見を踏まえて教師も考え直さなければいけないこと。
 ➢ 教師からアドバイスもこの先生きてくるが、学習者が大いに必要不可欠と感じた。
 □ <間違った行動の結果を挙げる>
 ➢ 教師からの意見を通すだけで学習者を未来へ担う人材へとは育たない。
 ➢ 必要であれば、間違った行動の結果を『教師の名前を記入しと一緒に会議を設ける。』

参考文献

金子一彦「マップ&シートで速攻理解！最新の教育改革 2019-2020」ムック

池上彰、佐藤優「教育激変-2020 年、大学入試と学習指導要領大改革のゆくえ」中公新書クラレ

東京大学教育学部教育ガバナンス研究会
「グローバル化時代の教育改革：教育の質保証とガバナンス」

久保木匡介「現代イギリス教育改革と学校評価の研究-新自由主義国家における行政統制の分析」

日本教育制度学会「政治主導による教育制度改革を問う」

刈谷剛彦 「教育改革の幻想」ちくま新書

関連箇所（平成 28 年文部科学省白書第 5 章高等教育の充実第 2 節高等教育の更なる発展に向けて）

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201701/detail/1398214.htm

添付資料（PPT スライド）2019 年 11 月 25 日

引用箇所（長者中学校ホームページから）

http://www.hachinohe.ed.jp/cyojya_j/userfiles/files/%E5%AD%A6%E3%81%B3%E5%90%88%E3%81%84001.pdf 2019 年 11 月 25 日

要 旨

本研究は、本学教職課程を受講する学生有志が、1年生の教職総論から2年生の教育課程論を学びながら、「学習者主体の教育へ質的転換」が我が国の教育改革の動向であるだけでなく、今、正に学生自身が切実に求める課題であることを自覚して、研究テーマを設定したことから始まったものである。アンケート調査を実施し、結果から、授業・課題・試験・成績と、すべて繋がっていることが分かる。発展段階としては、教師が学生一人ひとりに苦手科目や分野に沿って課題配布・アドバイスを行い、克服できる環境にするのがよい。

キーワード：学生主体の教育、ルーブリック、成績、課題、資格取得